

# 西大寺薬師金堂の調査

## — 第409次

### 1 はじめに

調査地は奈良市西大寺小坊町7-26、浄土院境内にあたり、庫裏の建て替えにともなう事前調査として実施した。調査地は隣接地よりも約0.7~1.0mほど高くなっており、かねてより西大寺薬師金堂の基壇である可能性が指摘されていた。そのため、これまでも2回の発掘調査がおこなわれている(2004年:平城第380次調査、2005年:奈良市04-13次調査)。

調査は、まず庫裏の南西隅にあわせて東西4m、南北4mの調査区を設定し、そこから1m幅で北に5m、東に5.5m伸びる調査区となっている。その後、調査の過程で南に1m×1m、西に南北3m×東西1.5mの拡張区を設定した。結果、調査区全体の面積は32㎡となった。調査期間は7月24日から8月3日である。なお、調査期間中2度にわたって浄土院の檀家の方々に説明会をおこなった。

基本層序としては、表土を除去すると標高76.4m程度で近世の整地面が確認された。その整地面を除去すると、標高76.1~76.3mで版築による基壇土を確認できた。これについては後述する。なお、地山層は基壇土の下、標高75.5mで確認した。以下では主に基壇土上で確認できた遺構について記述する。

### 2 検出遺構

#### 奈良時代の遺構

SB1000 西大寺薬師金堂である。今回の調査では2基の柱穴を確認することができた。また、調査区の全面にわたって基壇土が検出されている。

基壇は赤褐色土や灰色粘土、黄色土を交互に積んだ版築によって築かれている。断ち割りや調査区中央のSE1005壁面の状況から、版築は上層では厚さ3~5cmの比較的細かい単位で黄褐色系の土層が積み重ねられているが、下層では灰色系の粘質土が厚さ5~10cmとやや厚く重ねられている。なお、残存する基壇の高さは約60~80cmである。

基壇の範囲に関しては、調査区の北側において残存基壇縁を確認することができた。基壇化粧等は既に失われ

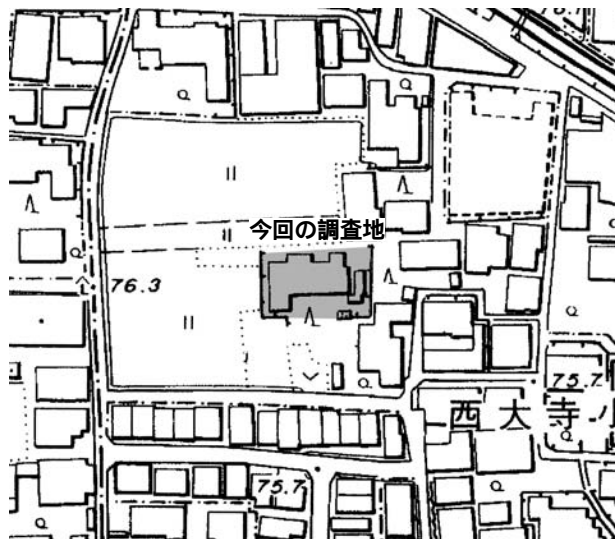


図186 第409次調査区位置図 1:2000

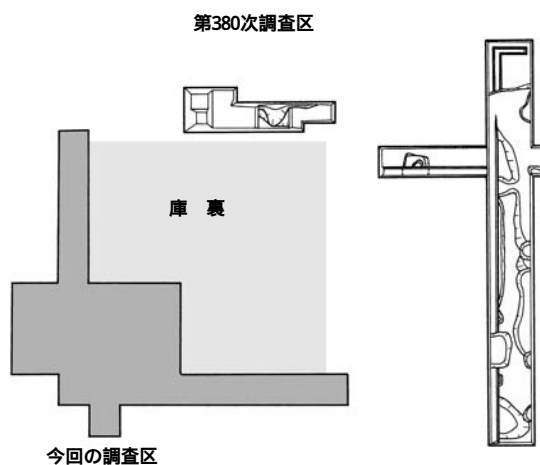


図187 第380次・第409次調査区位置図 1:50

ており、若干の削平を受けているものと考えられる。調査区の東側では東端まで基壇土が検出されたことから、基壇縁はさらに東に延びていることが窺える。ただし、後述のように推定される基壇縁がかなり東に位置しているにもかかわらず、調査区のすぐ東側で地形が70cm近く下がることから、基壇東側は大きく削平されていることがわかる。

なお、掘込地業についてはSE1005の壁面で確認できないことや、推定基壇縁のかかる第380次調査区でも確認されていないことから、直接地山上に基壇を構築したものと判断できる。

薬師金堂の柱穴は2基確認できたが、両者は種類が異なっている。調査区を西側に拡張して検出された柱穴は、南北幅が1.7mもある大型のもので、中には二上山産の流紋岩質溶結凝灰岩が2基据え付けられていた。これらの凝灰岩は風化の度合などから転用材と判断できるが、その出自は不明である。2基とも柱穴底に据えられ、その後で埋められている。おそらく、礎石や据付の根石はこの上層に設けられたと考えられ、この凝灰岩はその加重に対する地業的な役割を果たしていたと推定される。

もう1基の柱穴は調査区中央で検出され、礎石の据付痕と抜取痕を確認した。据付痕は最大幅120cm前後と西側の柱穴にくらべてやや小さい。また、柱穴底の高さも20cmほど高く、地業的役割を有するようなものも確認できなかった。

これらの柱穴の差違に関しては、建物の構造に起因するとも考えられるが、現状では定かではない。



図188 第409次調査区全景（拡張前、南西から）

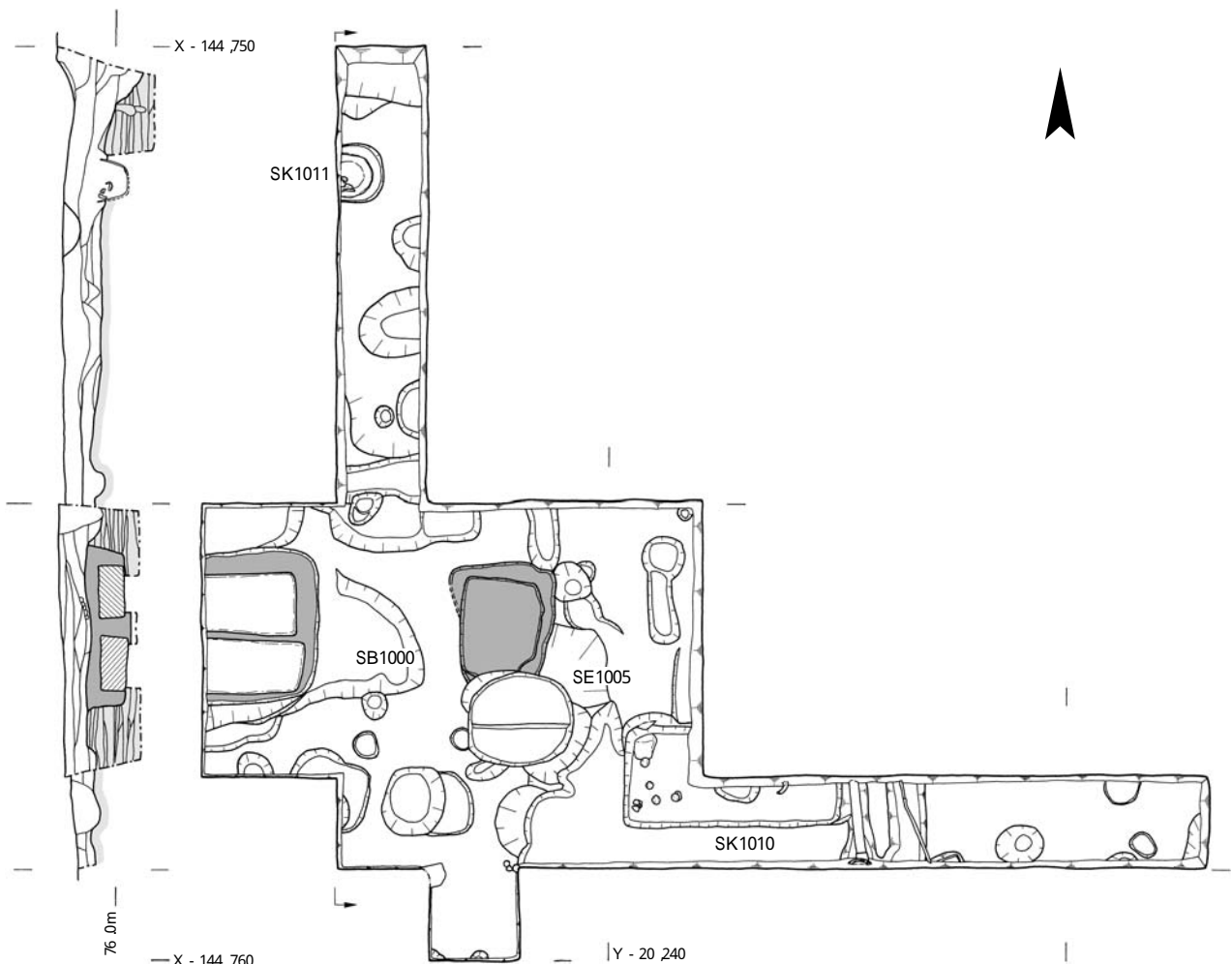


図189 第409次調査区遺構平面図・西壁断面図 1 : 80

### その他の遺構

SE1005 調査区中央で検出された素堀りの井戸である。やや東西に長い楕円形で、最大幅約1.1mである。今回の調査では底まで確認していないが、深さは1.2m以上ある。薬師金堂廃絶後に設けられたものだが、近世の整地面の下層に位置しているため、年代の下限が自ずと求められる。

SK1010 調査区の東寄りで検出された方形の土坑である。東西幅が2m以上に及ぶ大型のもので、中からは完形の土師器小皿5枚ほどが出土した。

SX1011 調査区の北側で検出された埋甕遺構である。この辺りでは近世の整地面が検出されていないが、甕の年代などから近世の整地にとまなうと判断できる。

SX1012 調査区西側の拡張区で確認された南北に並ぶ石列である。いずれも近世の整地面上に設置されており、東側の面をそろえるようにして置かれていることから、見切石としての機能が想定される。

SX1013 井戸SE1005の上層に位置していた遺構である。薬師金堂基壇土上層に位置する整地土を掘り込んだ上で、近世の軒丸瓦・軒平瓦を組み合わせて炉状の遺構を形成していた。

### 3 出土遺物

土器・陶磁器類 今回の調査ではコンテナ4箱分が出土した。わずかにSB1000の柱穴から奈良時代の土器片が出土しているのみで、SK1010出土の土師器小皿や、SX1011の甕など大部分が近世以降のものである。なお、SX1013からは焙烙や焼塩壺が出土している。

瓦磚類 表19からも明らかのように、出土量は極めて少ない。6133Nは西隆寺所用瓦で、西大寺からは初めての出土である。なお、西大寺76は平安時代のもので、近世の瓦の多くはSX1013から出土したものである。

表19 第409次出土瓦類一覧

軒丸瓦		軒平瓦		
型 式	種 類	点 数	型 式	点 数
6133	N	1	平安	1
西大寺76	A	1	近世	3
巴(近世)		6		
			軒平瓦計	4
軒丸瓦計		8	棧瓦(近世)	1
		丸瓦	平瓦	
重量	20.2kg	84.7kg		
点数	125	839		



図190 薬師金堂SB1000柱穴(北西から)



図191 井戸SE1005と基壇の版築状況(北から)

#### 4 まとめ - 薬師金堂の復原に向けて -

今回の調査で、初めて薬師金堂の柱穴を確認できたわけであるが、まだ薬師金堂の全体像を復原するにはデータが足りない。ただし、今後の調査の指標の一つとして、『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』（奈文研・奈良県教育委員会編 1990）で呈示されていた西大寺伽藍周辺の条坊復原をもとにした薬師金堂復原私案を以下に記しておきたい。

まず、凝灰岩が置かれた柱穴の国土座標（ $X = -144756.4$ ,  $Y = -20244.2$ ）と、西大寺伽藍中軸線を示す方程式（ $X = -\cot 0.1950 Y - 3654926.334$ 、『防災施設工事』の値を新座標系に置換済み）、および一条条間路心を示す方程式（ $X = -\tan 0.1850 Y - 144767.549$ 、同じく新座標系に置換済み）との距離をそれぞれ算出すると、西大寺伽藍中軸線より西へ約24尺、一条条間路心より北に415尺の位置にあたることになる。

まず注目したいのが415尺という数字である。これはおそらく400尺+15尺という関係で、一条条間路心より400尺の位置が薬師金堂の東西中軸にあたり、柱穴はそれよりさらに北へ15尺の位置にあたることを示しているであろう。「西大寺流記資財帳」によると、薬師金堂は

「廣五丈三尺」とあるので、ここから身舎2間（梁間15尺）庇の出が11.5尺という推定ができる。

次に桁行であるが、「資財帳」の「長十一丈九尺」という記載と、先ほどの24尺という数値、そして庇の出が11.5尺ということを考え合わせると、身舎は7間で、中央の3間が16尺、その左右の4間分が12尺という構造が推定される。おそらくは中央3間が全体構造の基礎をなし、それを支持するかたちで左右に2間ずつ柱が配置されたのであろう。調査区で確認されたもう1つの柱穴と、凝灰岩が置かれた柱穴の距離が概ね12尺であることも、これに矛盾しない。

最後に基壇の規模であるが、調査区の北端で確認された基壇縁は、推定される北側の庇から10尺にわずかに足りない位置にある。しかし、現状の基壇縁が若干の削平を受けていることを考え合わせると、基壇縁は庇より10尺の位置にあったと考えて差し支えない。ここから、基壇は東西139尺、南北73尺であったと推定されよう。

以上、薬師金堂の復原に関して一私案を提示したが、発掘資料から得られたわずかなデータをもとにして、あくまで理論的に構築した仮説にすぎない。ただし、今後の調査における方針を定める際の指標となるものと考えられる。（林 正憲）

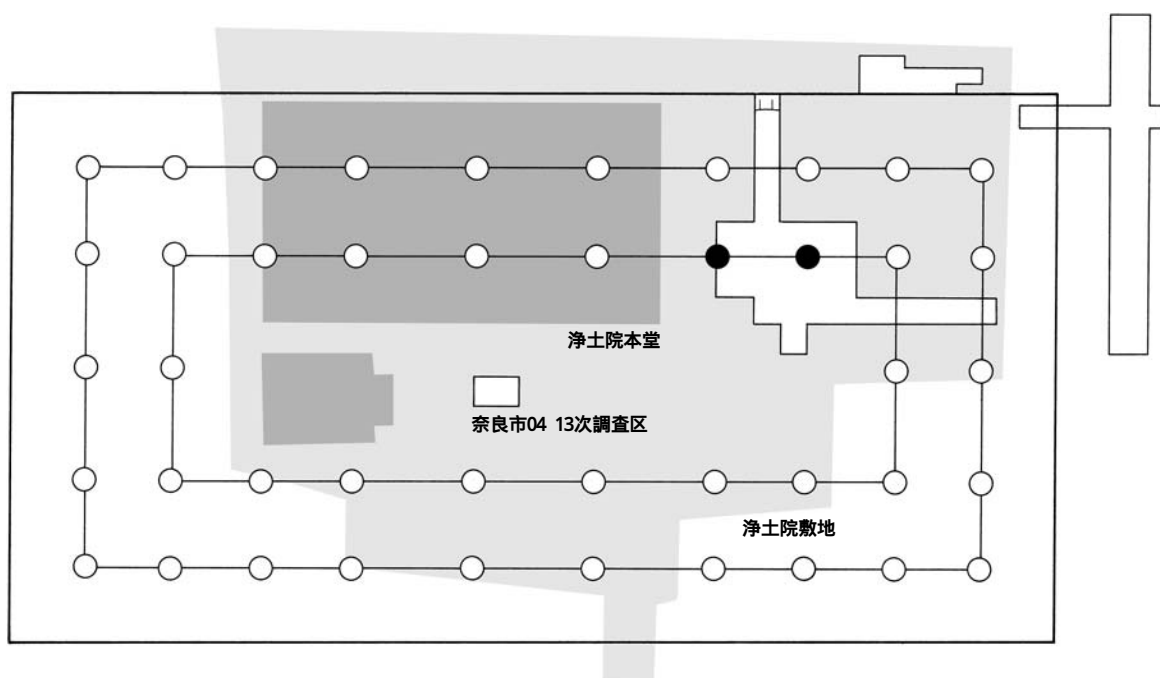


図192 薬師金堂復原私案 1 : 300